

古文 品詞分解 (動・助動詞) 「徒然草」世に語り伝ふること」問題②

げにげにしく、ところどころ^①うちおほめき、よく^②知らぬよし^③して、さりながら、つまづま^④合はせて

^⑤語る虚言は、恐ろしきことイなり。我がため面目^⑥あるやうに^⑦言は^⑧えれぬる虚言は、人いたく^⑨あらがは^⑩かず。

皆人の^⑪興ずる虚言は、一人、「さもなかり^⑫しものを。」と^⑬言は^⑭んも詮なくて^⑮聞き^⑯るほどに、証人に

さへ^⑰なさ^⑱れて、いとど^⑲定まり^⑳サぬ^㉑べし。

とにもかくにも、虚言多き世スなり。ただ、常に^㉒ある、珍しからぬ^㉓ことのままに^㉔心得^㉕たらん、よろづ

^㉖違ふ^㉗べから^㉘ず。下さまの人の物語は、耳^㉙おどろくことのみ^㉚あり。よき人は怪しきことを^㉛語ら^㉜ず。

かくは^㉝言へど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ^㉞信ぜ^㉟ざる^㊱べき^㊲にも^㊳あら^㊴ず。これは、世俗の虚言を

ねんごろに^㊵信じ^㊶たるもをこがましく、「よも^㊷あら^㊸じ。」など^㊹言ふも詮なければ、大方は、まことしく

^㊺あひしらひて、偏に^㊻信ぜ^㊼ず、また、疑ひ^㊽嘲る^㊾べから^㊿ず。

古文 品詞分解 (動・助動詞) 「徒然草」世に語り伝ふること」 「徒然草」世に語り伝ふること」 「徒然草」世に語り伝ふること」 解答②

げにげにしく、ところどころ^①うちおほめき、よく^②知らぬよし^③して、さりながら、つまづま^④合はせて
カ四用 打消 サ変用 サ下二用

ラ四用 断定 断定 比況 八四用 受身 完了 八四用 打消

⑤語る虚言は、恐ろしきことイなり。我がため面目^⑥あるやうに^⑦言は^⑧えれぬる虚言は、人いたく^⑧あらがはず。
ラ四用 受身 過去 八変用 婉曲 七上一用 存続

皆人の^⑨興ずる虚言は、一人、「さもなかり^⑩しものを。」と^⑨言は^⑩らんも詮なくて^⑩聞き^⑩たるほどに、証人に
サ変用 受身 強意 推量 断定 打消

さへ^⑪なさ^⑫れて、いとど^⑬定まり^⑭サぬ^⑮べし。
サ四用 受身 強意 推量

とにもかくにも、虚言多き世スなり。ただ、常に^⑯ある、珍しから^⑰ぬことのままに^⑱心得^⑲たらん、よろづ
ラ変用 打消 断定 打消

⑮違ふ^⑲べから^⑲ず。下さまの人の物語は、耳^⑳おどろくことのみ^㉑あり。よき人は怪しきことを^㉒語ら^㉓ず。
ハ四用 打消 カ四用 八変用 打消

かくは^㉔言へど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ^㉕信ぜ^㉖ざるナベ^㉗きニにも^㉘あら^㉙ず。これは、世俗の虚言を
ハ四用 サ変用 存続 打消 推量 八四用

ねんごろに^㉚信^㉛じ^㉜たるもをこがましく、「よも^㉝あら^㉞じ。」など^㉟言^㊱ふも詮なければ、大方は、まことしく
サ変用 存続 打消 推量 八四用

㊲あひしらひて、偏に^㊳信^㊴ぜ^㊵ず、また、疑^㊶ひ^㊷嘲^㊸るとべから^㊹ず。
ハ四用 サ変用 打消 打消 八四用 打消